《書　　評》

Dana Robinson, *Food, Virtue, and the Shaping of Early Christianity*

Cambridge: Cambridge University Press, 2020, Pp. xii+252.

坂　野　水　咲

本書は 4 世紀から 5 世紀初頭にかけての地中海沿岸地域において、日常生活のキリスト教化が進む中で食事行為が果たした役割を、ヨアンネス・クリュソストモス、アトリペのシェヌーテ、ノラのパウリヌスら 3 人の聖職者たちの著作に登場する、食に関連したメタファーの分析を通じて考察したものである。クリュソストモスはアンティオキア、シェヌーテはエジプト、パウリヌスはイタリアで活躍した人物であり、著作ではそれぞれギリシア語、コプト語、ラテン語を用いている。当時の地中海世界における代表的な地域を広く扱った研究と言えるだろう。著者はアメリカ・カトリック大学（UCA）で博士号を取得した初期キリスト教の研究者であり、本書は 2016 年から 2019 年にかけて博士研究員としてクレイトン大学で過ごす中で執筆された。

初期キリスト教史に関する研究では、特に近年、キリスト教そのものに留まらず、その成立・発展の歴史的背景であるローマ社会の様々な側面が注目されるようになっている[1)]。そうした試みは、キリスト教を古代地中海世界という枠組みの中の一宗教として相対化し、その全体の歴史の中で理解することにつながるが、本書もその大きな流れの中に属している。3 人の説教や詩を通じて Robinson は、食のメタファーを聖職者が用いることが、聖職者ではない一般のキリスト教徒たちがその教えを理解するのを助け、日常生活のキリスト教化を促したことを示した。そしてその中で何度も、ギリシア＝ローマ世界と初期キリスト教共同体の間の連続性や、聖職者たちが意図的に伝統宗教を利用していた可能性を指摘しているのである。

本書において、Robinson は「認知メタファー理論 Cognitive Metaphor Theory（CMT）」を活用している。これは Lakoff と Johnson によって一般化された理論で、メタファーは単なる文学装置ではなく、人間の心が知識を構成するプロセスの根幹であり、抽象的な事象を理解するための手段であると提唱するものである[2)]。更に Fauconnier と Turner による、複数の概念がメタファーを通じて統合される理論も Robinson は応用している[3)]。そしてこうしたメタファーに関する先行研究から、道徳・食物・人体はこの隠喩的思考が最も頻繁に標的とする領域であると指摘し、本書の目的、即ちキリスト教的な生活の形成と食事行為の関係

の解明に有効であると Robinson は結論付けた。

Anderson による書評[4] でも評価されているように、本書のアプローチは際立った学際性を有している。CMT は言語学と文学理論から取り入れたものであり、主題となっている物質文化としての食の概念は人類学の知見を応用したものである。更に各章で利用される、空間・場所を社会的に構築されたものと捉える手法は社会学から取り入れたもので、これらによって 3 人の食に関する議論とそれに伴う宗教的実践を様々な角度から分析することが可能になっているのである。なお Anderson は 3 人の事例における比較の不足や建築に関する議論についていくつかの批判を述べているが、Robinson の試みを概ね肯定的に捉えている。

本書の目次は以下の通りで、各章は 3 から 6 の節に分けて構成されている。

1. Introduction
2. The Medicine of Moderation: John Chrysostom and the True Fast
3. From Dinner Theater to Domestic Church in Late Antique Antioch
4. Shenoute's Botanical Virtues: Fruit, Labor, and Ascetic Production
5. The Places of God: Festivals, Food Service, and Christian Community
6. Meals, Mouths, and Martyrs: Paulinus of Nola and Sacrificial Spaces
7. Conclusion

第 1 章では導入として、地中海沿岸部において食事に関する議論が、キリスト教の規範をどのように形成していったのかを理解すること、そして食べ物に関する一般的な知識がキリスト教の信仰を強化するために発揮した力を立証することが、本書の目的であることを説明している。まずはキリスト教が成立する以前から存在する、小麦・葡萄・オリーブに代表される地中海世界の伝統的な食事とその環境について概観したのち、CMT を用いる意図と題材となる 3 人に関する先行研究に触れ、彼らの著作におけるそれぞれの美徳の見解を問うという本書の方向性を示している。

第 2 章と第 3 章ではまずクリュソストモスの説教を取り扱う。クリュソストモスは 4 世紀末から 5 世紀初頭にかけて活躍した聖職者で、398 年から 404 年まではコンスタンティノープル総主教を務めた。彼はアンティオキアで司祭となり、クリュソストモスの名（「黄金の口」の意）は彼の雄弁な説教に由来する。Robinson は彼の説教集について医学、哲学、経済、社会、空間の 5 つの観点から分析を行うが、前者 3 点を第 2 章に、残りの 2 点を第 3 章に振り分けた。第 2 章で著者が注目するのはクリュソストモスによって美徳と結び付くかたちで言及される「中庸」という言葉である。彼は世俗の信者たちに向けた説教の中で、身体の健康と美徳、つまり心の健康を結び付け、大食をその過剰さにおいて非難し食生活における中庸を説いた。そして Robinson は、このメタファーがアリストテレスやガレノスといったギリシア＝ローマ文化を想起させることを指摘している。彼らの提唱した四体液説におい

ては、身体に何か不具合がある際それは四体液（血液・粘液・黄胆汁・黒胆汁）のいずれかの過剰あるいは不足であり、その反対の性質の体液によってバランスを取り戻すことが、健康を回復するためには必要である。この均衡を重んじる点に著者は類似性を見出している。更にクリュソストモスは、当時のアンティオキアにおいて既に広く受け入れられていた四旬節の断食について「（ある種の）食を断つ事が、罪を断つことになる」、そして「『真の断食』はその達成によって感情的な満足を得ることができる、即ち『真のごちそう』なのである」という説明によって断食・節制を説いた。ここでも「食べる」という身体的な行為を「罪を犯す（その身に取り込む）」という精神的な行為と重ねるメタファーが用いられている。

そしてこの章の最も興味深い試みが、ヘルモポリスのテオファネスが残したアンティオキア滞在記の分析である。テオファネスは比較的エリート階層に属する人物で、322年もしくは323年の3月3日から6月20日までの約3か月半、アンティオキアに滞在した。その際の購入物を記録したパピルスが残されており、Robinsonはこの記録を分析して、宴のある日と、宴のない普通の日、そして特に質素な生活をした日それぞれの平均費用を割り出しテオファネスの生活を再構築した。そしてクリュソストモスが不道徳だとしたのは食卓における贅沢品（肉や蜂蜜など）の有無よりもむしろその量であること、そして人々には「宴」を「日々の食事」に近づけるようにと説いて、節制を戒めたのだと読み解いている。

第3章でも引き続きクリュソストモスの説教を、社会的、空間的な観点から分析する。クリュソストモスは古代末期のトリクリニウム（食堂）を「小さな教会」、即ち神と人間の正しい関係を日常の中で確認するための場として描いたと、Robinsonは解釈した。説教においてたしかに彼は他の聖職者たちと同様に、トリクリニウムを異教的でふしだらな「劇場」だと厳しく批判している。トリクリニウムの壁にはフレスコ画で、床にはモザイク画でギリシア＝ローマの神話が表現されており、また饗宴の場には娼婦や踊り子が同席することもあったからだ。

しかし同時にクリュソストモスはこのトリクリニウムという場で、教会で聴いた説教や聖書について会話し、また質素さを贅沢よりも優れているとする価値観を食事によって実践することを説き、キリスト教の道徳に沿った形で空間を再定義しようと試みているとも著者は指摘する。Smith [5)] は「他者をもてなす」つまり「歓迎」の実践の場としての機能がキリスト教徒の食卓には備わっており、それはキリストや神による「歓迎」のメタファーになっていると主張しているが、Robinsonもこの先行研究を肯定的に捉え、更に貧しい客をもてなすという美徳を示し、「平等性」が実現される場としての役割もクリュソストモスの説教の中に見出せるとしている。このようにトリクリニウムは、クリュソストモスにとって悪徳に満ちた最悪な空間であると同時に、キリスト教の美徳を実践できる最良の空間でもあった。Robinsonはこれをtrue theaterと呼び、この空間の再利用や会話を深める場としての食卓の捉え方を踏まえ、更にモザイク画の細かな分析を通して、ギリシア＝ローマの伝統的な価値観はキリスト教の中に取り入れられている、と考えている。

続く第４章と第５章は、アトリペのシェヌーテによる説教集を扱っている。シェヌーテは４世紀末から５世紀半ばに活躍した、エジプトの白修道院の修道院長である。シェヌーテは叔父から受け継いだこの修道院を精力的に指導し、またコプト語とギリシア語の両方に精通していた。彼の著作としては、主に修道士・修道女に向けた手紙と説教文を収録した指導書である９巻のカノンと、一般人を交えた公開説教を収録した８巻のディスコース、そして未分類のものが残されている[6)]。著者は主に、ディスコースの中の説教に登場する「人は植物であり、美徳は果実である」というメタファーに注目し、世俗の信者たちへのシェヌーテのアプローチを分析した。植物が育つには水が不可欠であり、また美味しい果実をつけるには様々な世話が欠かせない。そして収穫された果実は人間が食べ、その身体に同化される。シェヌーテは植物＝人間、水＝神の教え、様々な世話＝（精神的な奉仕も含む）労働、果実を食べる主体＝神あるいはキリスト教共同体、という図式を用いることによってキリスト教の精神を表現したのである。

更に興味深いのは、果実を形容する語彙の分析である。シェヌーテは良い果実（= 美徳）を表す際には「甘い」や「柔らかい」を意味する語を、悪い果実（＝悪徳）を表す際には「苦い」や「固い」を意味する語をしばしば用いた。味や食感という味覚と、美徳・悪徳を結びつけたのである。これらのメタファーが、日常的に農業に従事し、食事する世俗の信者たちにとって、キリスト教を理解するための助けになっただろうことは想像に難くない。なお Robinson は、彼の植物に対する理解にはテオフラストスの影響がみられるとして、ここでもギリシア＝ローマの文化と初期キリスト教の連続性を指摘している。

第５章では、同じくディスコースに収録されている説教を題材に、メタファーから実践に視線を移してシェヌーテの食事行為に対する姿勢を読み解いた。著者はこの章で、シェヌーテは葬儀における聖餐式と殉教者の祝日という俗人による食事イベントを批判し、キリスト教の共同体の中心に修道院を据えることを主張している、と考えている。

彼は「完全な共同体とは平等の中で生きることを意味する」というように、食べ物や服装に現れる「偏愛」を厳しく批判し、「平等性」に重きを置いた。そしてそれが最もよく実現される場所として修道院を考えていたのである。修道院での食事の具体例として挙げられているのが、340 年代にシェヌーテの修道院で約３か月にわたり行われた数千人の難民への給食だ。なお Anderson はこの記録を大変興味深いとしたうえで、第２章に登場したテオファネスの事例との社会史的な類似性を指摘し、両者の比較が不十分であることを批判している[4)]。

またシェヌーテは過剰な聖餐式を非難し、個々で貧者に施しを行うよりも修道院に寄付すること、即ち修道院が集め、貧者に還元するシステムを促進した。ここから見えてくるのは、キリスト教における食事行為は修道院が主導すべきであるというシェヌーテの主張である。また、日常的な食事とその生産は、キリスト教の実践において断食や聖餐式といった非日常的な儀式よりも重要な役割を果たしたということもわかる。著者はこの章を、彼がギリ

シア＝ローマの伝統的なもてなしとパトロネージ、共同食事の概念を引き継ぎつつ、キリスト教の食事を慈善や社会的相互性、権威への服従を表すものとして定義し、その舞台としての修道院の独自性を高めたのだとまとめた。

第 6 章ではノラのパウリヌスが著した *Natalicium* における、異教の「犠牲」とキリスト教の「殉教」を結び付けるメタファーを分析している。パウリヌスはガリアの元老院議員身分に所属するラテン詩人だったが、390 年頃にキリスト教へ転向してカンパニアのノラに隠遁、409 年にはノラの司教に叙任された。彼はアンブロシウスやアウグスティヌスらに宛てた約 50 通の書簡や 35 篇の詩 *Carmina*（*Natalicium* はこの中の一篇）を残しており、Robinson は後者の史料を扱う。*Natalicium* は 406 年の 1 月、聖フェリクスの祝日に捧げた詩であり、田舎の農夫が犠牲獣を捧げるという物語が含まれている。ここで問題になるのは、公的な犠牲獣の奉納を禁止した 392 年よりも後に、なぜこのような異教的な犠牲の物語をパウリヌスは肯定的にも取れる調子で語ったのか、ということである。この詩の特徴的な点は、語りの主体が人間ではなく犠牲に捧げられる動物にあるところで、Robinson はこれが殉教のメタファーだとして、パウリヌスはローマの伝統宗教をキリスト教に同化させ、キリスト教化のために利用したのだと考えている。

Castelli による「犠牲獣は無垢なままだったが奉納者は罪人となってしまったので、キリスト教徒は自らの立場を奉納者から犠牲者に置き換えた」という論[7)]、また Rouwhorst の「ギリシア＝ローマ世界から受け継いだ犠牲の概念を、初期キリスト教徒は『脱宗教化』し、『再宗教化』する必要があった」という先行研究[8)]に沿って、Robinson は分析を進める。そして *Natalicium* で用いられているメタファーを、一方で従来のローマ人の慣習とキリスト教的な価値観の接合を、他方でローマの理想的な家族生活からキリスト教的な友愛への社会的な転換を物語るものだとした。またこの章の最終節では、口という器官に注目し、パウリヌスが仕えた聖フェリクスの祠をキリストの体を反映したものとして、その平面図に基づいて、信者自身が犠牲獣になるというイメージの考察を試みている。

第 7 章では、以上 3 人の著作が当時の「食に関する一般的な知恵」の力を実証するものだと著者は結論付けた。4 世紀のキリスト教指導者が世俗の信者にキリストの教えを理解させ、実践を促すために食事のイメージを利用したということは、初期キリスト教史の研究において食が、レヴィ＝ストロースの言葉を借りれば「考えるのに適している」ことを示している。食のメタファーは神学や哲学の語彙を必要とすることなく、非エリートのキリスト教徒が、道徳的行動、キリスト教のアイデンティティを感覚的に理解することを可能にした。更には個人的な食生活の管理であったり、他の信徒との共同食事であったり、葬儀の聖餐式を主催したり、殉教者のための祝宴に資金を提供したりといった行為によって、彼らがキリスト教を実践することをも助けたのである。

Robinson は本書で扱った 3 つのケーススタディは氷山の一角に過ぎないとしつつも、それらを統合することでキリスト教における食の議論が持つ想像力の広がりと、従来の価値観

への創造的な適応力を推し量ることができると述べている。そしてこの研究で重要なのは、なぜ食のメタファーがそれほど一般的なのか、なぜ食の習慣が初期キリスト教においてそれほど頻繁に議論の対象となるのかということを明らかにした点であると強調した。初期キリスト教史において食事は決して単なる食事ではなく、社会的な劇場、宗教的な儀式、道徳の実践、経済的な投資、空間の創造、これら全てなのだ。

以上が本書の紹介である。本書の一番の功績は、扱う史料こそキリスト教の指導者層が著したものではあるが、食事という日常的な行為に紐づく表現を通して、記録には残りにくい非エリートの世俗の一般民衆がどのようにキリスト教に触れ、自らの生活の中に取り込んでいったのかを明らかにしている点だろう。なぜキリスト教がローマ帝国で拡大したのか、という大きな問いに、改宗という劇的な変化のプロセスではなく、何気ない日常に信仰が根付き、強化されていく様子に着目して取り組んでいるのである。その考察対象は言葉による表現にとどまらず、モザイク画や建築といった視覚的な領域にまでに及ぶ。特に第5、6章においてシェヌーテの白修道院と聖フェリクスの祠の平面図を分析し、住人あるいは訪問者が感じていたことを考察した試みはRobinson独自の視点で印象的だ。本書ではまだ深く踏み込んではいないものの、例えばキリスト教以前の宗教実践における空間利用との比較など、更に議論の膨らむ可能性を感じさせる着眼点である。この強固な学際性は議論をより深いものへと導いており、Robinsonのアプローチは当該分野において重要なものとなるだろう。こうした点で本書は研究の目的を達成していると判断してよいと思われる。

また本書の議論の特徴として、ほとんど全ての章においてギリシア＝ローマ文化との連続性を念頭に置いていることが挙げられる。キリスト教の道徳に関しては、それが従来の社会一般のものと価値観を共有していていたのか、あるいはキリスト教独特のものだったのかという点での議論があるが、本書は本質的には後者の立場を取りつつも、キリスト教の教えを広め、定着させるために当時の指導層はギリシア＝ローマの価値観を部分的に取り込み、利用する適応力を発揮したという点を強調しているのではないかと思われる。また第3章、5章、6章においてRobinsonは「空間」としての食事の機能に強い関心を示しているが、これについてはDonahueが社会学における共食の5つの類型を参考に行った研究がある[9)]。彼は帝政初期ローマの共食には「保護者と被保護者の関係性の確認」という機能と「グループアイデンティティの強化」という機能の2つを強く有していたと主張しているが、Robinsonの議論を含めると後者の機能がキリスト教化の進む古代末期にも継承されていたと言えるだろう。

批判すべき点としては、3人の食に関する議論の類似性、共通性については十分に言及されている一方で、差異の比較についてはあまり議論が及んでいないことが挙げられる。3人の言葉は食に関する比喩という点では同じだが、結びついた先は健康だったり植物だったり殉教だったりと三者三様である。著者自身も「氷山の一角」と述べている通り、食のメタファーを利用した言説には、今回Robinsonが扱った時代に限らず検討可能なものがまだま

だ多く存在するだろう。今後彼女によって示された視点によってより多くの事例の研究が進めば、本書において不足気味であった通史的な理解が可能になるかもしれない。また文献史料からどれほど読み取ることができるかは定かではないが、キリスト教の拡大期における女性改宗者の重要性が指摘される研究動向を踏まえると、世俗の女性信者が食事を用意する過程をどのように捉えていたのか、どのような役割を果たすように期待されていたのかという女性史の観点も更なる検討の余地があるだろう。

加えてもう一つ批判を挙げるとすれば、ユダヤ教の食規範・それに関する言及との関係性についての議論がやや乏しい点が考えられる。ユダヤ教にはカシュルートと呼ばれる食規範が存在し、食べてよいものといけないものが厳しく区別されている。地中海世界の伝統文化の影響を受けながらも、食事によって宗教的なアイデンティティを形成・強化していたのはユダヤ教も同様なのである[10]。勿論これに言及がないわけではないが、本書がキリスト教の比較対象として注目するのは専らギリシア＝ローマの伝統宗教であり、より直接的な前身としてユダヤ教との比較検討にもう少し紙面を割いても良かったのではないだろうか。

本書はCMTという理論を利用することで、教会の指導者が世俗の一般信徒にどのようにアプローチしたのか、そして彼らがどのようにキリストの教えを理解し、実践したのかという問いに挑戦した。世俗の人々がキリスト教に触れ、取り込んでいった様子をその身体性に注目して分析した本研究は、初期キリスト教史の研究に新たな視座をもたらしている。今後の研究の発展を注視したい。

註

1）Wayne A. Meeks, *The First Urban Christians: The Social World of the Apostle Paul,* London, 1983（加山久夫監訳『古代都市のキリスト教―パウロ伝道圏の社会学的研究』ヨルダン社、1989）; Rodney Stark, *The Rise of Christianity*, Princeton, 1996（穐田信子訳『キリスト教とローマ帝国　小さなメシア運動が帝国に広がった理由』新教出版社、2014）; 松本宣郎『ガラリヤからローマへ―地中海世界を変えたキリスト教徒』山川出版社、1994。

2）George Lakoff and Mark Johnson, *Metaphors We Live By*, Chicago, 2nd ed., 2003（橋本功・八木橋宏勇・北村一真・長谷川明香編註『メタファに満ちた日常世界』松柏社、2013）.

3）Gilles Fauconnier and Mark Turner, *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities*, New York, 2002.

4）Mark Anderson, "Review: *Food, Virtue, and the Shaping of Early Christianity*, by Dana Robinson", *Studies in Late Antiquity*, 2022. 6（1）, pp. 207-208.

5）Dennis Smith, "Dining with "Other" in Earliest Christianity", in: Wim Broekaert, Robin Nadeau, and John Wilkins（eds.）, *Food, Identity, and Cross-Cultural Exchange in the Ancient World*, Brussels, 2016, pp. 99-106.

6）宮川創「コプト教父・アトリペのシェヌーテによる古代のコプト語訳聖書からの引用」『東方キリスト教世界研究』5、2021.12、3-24 頁。

7）Elizabeth Castelli, *Martyrdom and Memory: Early Christian Culture Making*, New York, 2004.

8）Gerard Rouwhorst, "Sacrifices in Early Christianity: The Social Dimensions of a Metaphor", in: Joachim Duyndam, Anne-Marie Korte, and Marcel Poorthuis（eds.）, *Sacrifice in Modernity: Community, Ritual, Identity*, Leiden, 2016, pp. 132-146.

9）John F. Donahue, “Toward a Typology of Roman Public Feasting”, in: Barbara K. Gold and John F. Donahue（eds.）, *Roman Dining*, Baltimore, 2005, pp. 95-113.

10）Jordan D. Rosenblum, “Jewish Meals in Antiquity”, in: John Wilkins and Robin Nadeau（eds.）, *A Companion to Food in the Ancient World*, Chichester, 2015, pp. 348-356.